祖母の葬式

民俗学者
大谷 亨（おおたに とおる）

中国の田舎を旅していると、しばしば葬式に遭遇する。

あの日、私は湖南省の湘郷（しょうきょう）という町にいた。夕飯を求め、めぼしい食堂を物色していたところ、どこからともなく祭り囃子が聞こえてくる。民俗学者の血が騒いだ私は、とっさに音の鳴る方へ駆け出した。

ピーヒャラドンドンドン。とある路上の一角に、音の発信源は見つかった。そこにはパチンコ屋のそれそっくりのケバケバしい花輪が並び、白装束に身を包んだ大勢の男女が大声で泣きわめいていた。よく見ると、会場の隅っこに立派な棺が安置されているではないか。祭りかと思いきや、誰かの葬式だったらしい。

呆気にとられる私をよそに、葬式のボルテージは順調に高まっていく。ドカン！ドカン！と打ち上げ花火が炸裂したかと思うと、楽器隊の生演奏は（なぜか）「ジングルベル」に切り替わり、奇妙な儀礼が始まった。

注目すべきは、道のど真ん中に設けられたアーチ状の橋。道士集団と遺族らがゾロゾロと列をなし、まるで電車ごっこに取り憑かれた児童のように、右から左へ、左から右へ、渡橋を延々と繰り返している。その間も目に大粒の涙を浮かべる遺族らだったが、爆音で鳴り響くジングルベルのメロディがあまりに脳天気なせいか、不思議とそこに悲壮感は感じられなかった。

「故人のために黄泉路をお清めしてるんだ」。野次馬の一人が、よそ者丸出しの私に向かって、そう解説してくれた。どうやらあのアーチ橋は、此岸と彼岸をつなぐ冥途の架け橋だったらしい。私は夕飯のことなどすっかり忘れ、カタルシスに満ちたその祭りのような葬式をうっとりと眺め続けたのだった。

湘郷で遭遇した葬式の一幕

翌早朝、事は起きた。枕元で鳴り響くスマホの着信音。見れば母からだ。おかしな時間にかかってくる身内の電話ほど恐ろしいものはない。出ると、母は涙に声を震わせていた。北京の祖母が亡くなったらしい（私の母は中国人である）。

私はすぐに旅を切り上げ、祖母の葬式に参列すべく北京へ急いだ。だが、結論から言えば葬式は行われなかった。理由は、「意味がないから」。

誤解して欲しくないのだが、我が親族は揃いも揃って過干渉で過保護な、情に厚すぎる典型的な中国人であり、むろん祖母は深く愛されていた。したがって、上記の判断は決して祖母の死に対する軽視を意味するものではなく、それとはまったく別の道理に基づく判断なのだ。

その道理とは、ずばり唯物論――すなわち、天国もなければ地獄もなく、人は肉体的に死んだらそこで終了と考える、（多分に共産党の教えに影響を受けた）ある種の合理的判断にほかならない。

こうして祖母は、なんら特別な儀式を経ることなく、病院の霊安室から焼き場に運ばれ、作業員による無駄のない手捌きのもと、瞬く間に荼毘（だび）に付されたのだった。ちなみに、「刺激が強すぎる」という叔父の合理的判断により、祖父は留守番を命じられ、焼き場に行くことさえ叶わなかった。

北京郊外の焼き場にて軍服姿の作業員に担がれる祖母の棺

むろん、私は大いに違和感を覚えていた。いくら刺激が強かろうと、死から目を背けてはかえって心の整理がつかないのでは、と。しかし、郷に入っては郷に従え、北京の親族が納得しているならばそれでよく、外国育ちの私が軽率に批判すべきことではない。文化相対主義的にも、そう考えるのが正しい。

ところが、事はそう単純にはおさまらなかった。一見理知的に振る舞っていたかに見えた親族たちの感情が徐々に綻びを見せはじめたのである。明確な引き金となったのは、叔父のある行動だった。叔父は、やはり「刺激が強すぎる」という彼なりの合理的判断のもと、遺骨をこっそり自宅に持ち帰ったところ、それが祖父の逆鱗（げきりん）に触れたのだ。祖父は見たこともない形相で怒りを露わにし、遺骨を返すよう泣き叫んだ。

その後、堰を切ったようにトラブルが続出。各々が自分一流の合理的判断をぶつけ合い、果ては自宅に遺影を飾るべきか否かという議論にも値しないような問題で揉めては、大粒の涙を流すのだった。その涙はカタルシスをもたらすどころか、我々をより一層悲しみの底に引きずり込んだ。

「意味がないから」と捨て去られた葬式の伝統。だが、唯物論はそれに代わる死への対処法をいまだ明確に提示してはくれていない。愛する者の死を合理的に解消できるほど、我々の心は都合よくできていないのだろう。

私は湘郷で目の当たりにした、昨夜の光景を思い出していた。祖父と叔父の手を取り、あの意味不明な「電車ごっこ」の列に今すぐにでも参列したい思いに駆られていたのである。

略歴
1989年、北海道生まれ。厦門大学外文学院日語語言文学学科・助理教授。専攻は中国民俗学。主な業績に、『中国の死神』（青弓社、2023年）、「「おじさん動画」と自由の風」（井口淳子・山本佳奈子編『ファンキー中国――出会いから紡がれること』灯光舎、2025年、所収）などがある

Essay 時の調べ